

## 血液製剤使用量（需要量）の将来予測の試み

財団法人 血液製剤調査機構 専務理事 高野 正義

### 1. 推計方法

血液製剤の将来的使用量（需要量）を予測することは血液製剤の安定供給のために重要である。しかしながら、血液製剤の使用量は、医学・医療技術の向上、医療制度、疾病構造、受療状況、血液製剤使用ガイドライン等により容易に変わり得る。そこで、血液製剤使用量に影響を与える諸要因に大きな変化のないことを前提にして、2つの推計を試みた。

第1は平成18年度厚生労働科学研究「血液製剤需要量の将来予測手法の開発に関する研究」（2年計画の初年度）において、将来予測に用いられる手法である「デルファイ方式によるアンケート調査」を実施し、その手法の妥当性を試みたので、その研究結果をもとに将来の使用量を推計した。なお平成19年度の厚生労働科学研究において、デルファイ方式による将来予測の精度の向上を図ることとしている。

第2は過去の年間使用量の推移（表1「血液製剤使用量12年の推移」参照）から推計した。両者の推計は平成19年の年間実績使用量（速報値）を基礎として平成25年まで推計した。新鮮凍結血漿製剤の平成20年の使用量の推計値は、増加要因、減少要因が拮抗しているとして両推計とも平成19年と同じとした。血液凝固第Ⅷ因子製剤については、デルファイ方式の調査を行っていないので、過去の使用量推移から上位推計と下位推計を算出した。

### 2. 推計結果（推計値）

平成25年までの年間使用量の推計値は表2「血液製剤将来予測使用量」及び図1～6のとおりである。

平成25年の年間使用量は、

- ・赤血球製剤は580万～600万単位で、わずかに増加する。
  - ・新鮮凍結血漿製剤（FFP）は236万～242万単位で、かなり減少する。
  - ・濃厚血小板製剤（PC）は、812万～836万単位で、増加する。
  - ・アルブミン製剤は32,100Kg～32,700Kgで、かなり減少する。この場合の原料血漿の必要量は126万L～129万Lとなる。平成25年度の使用量の推計ではわずかに減少して125万L～128万Lとなる。平成25年度の遺伝子組換えアルブミン製剤の使用量が全アルブミン製剤の使用量の20%を占めると仮定すると、原料血漿の必要量は100万L～103万Lとなる。
  - ・免疫グロブリン製剤は3,410Kg～3,530Kgで、ほとんど変わらない。この場合の原料血漿の必要量は94万L～98万Lとなる。平成25年度の推計を行っても同様に94万L～98万Lとなる。
  - ・血液凝固第Ⅷ因子製剤は、3億6500万～3億8200万単位で、かなり増加する。
- 平成25年度の血漿由来製剤の占める割合が30%と仮定すると、血漿由来製剤の使用量は1億1000万～1億1500万単位となる。

（平成20年2月 作成）